

チベット民族の心

——ハタ「ཁ་བརྒྱུད་ལྗང་ལྗང་།」——

三木友里*

(一) 〈序 文〉

白く長い布——ハタ。

1997年7月、あるきっかけで著者がチベット自治区果洛州藏族自治州久治県人民政府から招請を受け、当地では中国人、外国人を含めて外部からの者としては初めての招待者として、訪問団を形成し、この幻の遊牧民族が居住する地域を訪ねました。

その目的地に辿り着くのに当地は4,500mの高原にあり、当然、鉄道や航空機といった便利な交通手段がある訳ではないので青海省の西寧市からまる2日半ジープに乗って、いくつもの峠を越え、黄河、長江の源流を遡りようやく辿り着きました。

その県外まで近づくと、現地の青年騎馬隊が待っており訪問団の姿が見えると、馬に乗って獵銃を天に向けて発砲し走りながら私達を迎えて下さいました。またいつ来るとも知れぬ私達を県境で何時間も前から県長（県知事）を始め、教育局長や県政府関係者の方々が、皆手に見たことのない白く長い布を手を持ち待っていて下さいました。

そして私達が車から降りて挨拶すると、県長をはじめ皆さんが、一人一人に手元に持つ白い布を首に掛けて下さいました。これが初めての「ハタ」との出会いでした。（写真15）

この訪問からしばらく経った2001年の1月のある日突然、著者の自宅のポストに、チベットの住所から郵便物が自宅に届き、中を開けると一通の手紙と真白なハタ一本が入っていました。

著者は今まで名前を出さずにチベット自治区で奨学金を出してきておりますが、その奨学金は小学校から学費、生活費を全て含めた援助で、本人が進学できるところまで援助するというものです。その手紙の出し主が奨学金を受けた中の一人でした。

その手紙には、彼はずっと自分に奨学金を出している人が知りたかった。奨学金を受けて2000年から青海民族学院大学に入学し、いろんな人に聞いてやっと奨学金の出し主が著者だと分かり、会えなくてもどうしても自分の感謝の気持ちを表したかったらしい。そして、どうやって自分の感謝と尊敬の気持ちを表せばよいのか考えて悩んだ結果、自分はチベット人ですから、チベット人にとって最高の真心と最高の敬意を表すことができるのは真白なハタだと思い、手紙に添えて送りますと書いてありました。

この内容を自分の読みが正しいのか自信が無かったので、知り合いのチベット人学者にも内容を確認してもらいました。そして、上述の意味が分かった瞬間、このハタこそ私だけでなく、たくさんのチベットに関心があり研究をしている方や、チベットに志を持っている

240
(33)

* 一般教育 教授 中国語

方々にとって知ろうとしている、「チベット民族の心」ではないだろうかと思いました。

そこで、自分のライフワークとしてチベット研究を、先ずこのハタからしようと思いました。ところが研究をし始めるとチベットの文献、資料の入手は困難であり厚い壁を感じました。

ご承知のことと思われませんが、チベット学の研究は、中国のみならず国際的に一つの専門分野的な学問として成立しています。中国ではチベット、北京、甘粛、青海、四川等に50数ヶ所のチベット学機構を配置しており、北京にはチベット学研究センターを設立して大量の研究課題を行う機構となっていて、チベット語、中国語、英語による約30種の刊行物を出版しています。

中国では解放後の1950年代から1970年代にかけて、大規模な社会調査を行い、豊富な文献資料を蓄え、研究領域は政治、経済、民俗、宗教、歴史、言語、文化、密教、工芸などと幅広く研究著作も多く発表され、関係ある学術著作、論文だけでも1000冊以上あり、調査部門だけでも10数種あり、翻訳された論文は30種類余りあり、チベット自治区だけでも、社会科学院等10以上のチベット学研究機関があります。

しかし著者が能力の限り、いろんな調査研究、論文発表等を探しましたが、このハタに関して論じられている文献は、1994年に出版された「西藏文芸」、「西藏民俗」、「中国西藏」にそれぞれハタに関する記述が一遍りずつ簡単な説明があるだけで、そのうち「哈達文化的内涵及其他」、「藏族哈達文化」の二つは同じ著者であり、「藏族哈達文化」は蔵文で書かれたものです。中国国家“九五”重点図書出版計画項目として、1998年に西藏人民出版社、浙江人民出版社の共同出版で発刊された、現在中国で最も著名な西藏学者として権威ある王尧、陳慶英等の大学者達が編纂した「西藏歴史文化辞典²⁾」に分かり易くハタについて紹介する項目がある以外は、ほとんど見当たりませんでした。

著者は、1997年以後、毎年欠かさずチベットを訪ねる度に至る所で資料を求めましたが、努力が足りないせいかもしれませんが、苦慮した末、チベットという特殊な地理環境と、歴史や文化にも特殊な環境におかれていることを思い、先ずこれまで入手してきた、限られた資料と文献で着手することにしました。資料収集のために、チベット自治区人民政府から、チベット仏教の寺院では最も地位の高い大昭寺（ジョカン寺）、チベット最大規模で歴代ダライ・ラマが座主を務めた哲蚌寺（デプン寺）、学問寺の最高権威である拉ト楞寺（ラブラン寺）、パンチェン・ラマが座主を務める扎什倫布寺（タシルンポ寺）、塔爾寺（タール寺）、研究機関では、西藏大学、青海民族学院大学、西藏自治区檔案館、北京の社会科学院民族研究所、中央民族大学等々いろんな機関に協力を求め、できるだけ専門家達の助けを頂き、蔵文文字の手抄本、木刻本など原文資料を解読し、現地で調査等を重ねて参りました。

ここで今までまとめたものを皆さんに発表することに致しましたが、たくさんの問題点があることだろうとも思います。ただ皆様のご指導を賜ればと思い、また、抛磚引玉になれば幸いに存じます。

(3) བཟླ་པ་གསུམ་ནི།

“དཔལ་ལྷན་གྱི་མ་བཟླ་ན།

དཔལ་བར་བྱེད་པའི་རུ་མ་མེད།

མཛངས་ལ་ཡིག་ཚང་མ་བཟླ་ན།

ཕྱིན་ཆད་མཛངས་ངན་ཤན་མི་བྱེད།

ལེགས་ལ་བྱ་དགས་མ་བཟླ་ན།

སྐན་ཆད་ལེགས་པ་སྐྱ་ཡིས་བྱེད།”

ཅེས་འབྱུང་བ་ནི། གཡུ་ལ་རྩེ་དག་པོ་ལས་རྣམ་པར་རྒྱལ་བའི་
 དཔལ་པོ་བྱས་ཤིང་ཅན་ལ་ལྷན་སྐྱོན་གྱི་གོས་སྐྱོན་བྱ་དགས་བྱེད་ནས་……
 བཟླ་དགོས་པ་རྣམས་མ་བཟླ་ན། ཕྱིན་ཆད་དཔལ་པོ་ཅན་པའི་རུ་མ་
 རྟེ་གཞི་ཉེན་མེད་པར་འབྱུར་བས་ངེས་པར་དཔལ་ཉགས་ཀྱིས་བཟླ་དགོས་
 པ་དང་གཅིག རྣམ་སྤྱོད་ལ་མཁས་ཤིང་མཛངས་པའི་སྐྱོན་པོ་དང་མི་རྩ་
 བྱས་ཤིང་ཅན་ལ་གཡུ་དང་། གསེར་སྐྱོན་ཉེན་པོ་ཆེད་ཡིག་ཚང་གིས་མ་
 བཟླ་ན། ཕྱིན་ཆད་མཛངས་པའི་མི་དང་ངན་པའི་མི་ཤན་མི་བྱེད་པས་
 ངེས་པར་རུ་མཁས་ཤིང་མཛངས་པའི་མི་རྣམས་ཡིག་ཚང་གིས་བཟླ་དགོས་
 པ་དང་གཉིས། རྩེ་འབངས་ཀྱི་དོན་རྒྱ་ལྷན་བསམ་གྱིས་ལས་ཀྱི་ལེགས་པོ་
 བྱེད་མཁན་མི་ལུ་ལྱང་རྣམས་ལ་བྱ་དགས་ཆོམ་པར་བྱས་ནས་མ་བཟླ་དགོས་
 བ་སྐན་ཆད་ལྱར་བཅོན་ལྷན་བསམ་དང་ལྷན་པའི་མི་རྩ་ཅོན་མི་སྤྱོད་པས་
 ངེས་པར་རུ་དོན་པོའི་བྱ་དགས་བཟླ་དགོས་པ་དང་གསུམ་ནི་དམག་
 སྤྱོད། འབངས་གསུམ་ཀྱི་ནང་ནས་ཅོན་པའི་རྩེ་པོ་ལུ་རུ་བྱུང་བ་རྣམས་
 གཞེངས་སུ་བཟླ་དགོས་པའི་སྐྱར་ཡིན།

第三褒賞：君臣の事業に熱意のある優秀な人材に褒賞を取らせなければ、以後熱意ある優秀な人材は生まれず、豊富な物資を給い奨励しなければならない。

以上の三条は軍、政、民の中より優秀な人材に対する奨励の規定として定める。

この第一褒賞にある、「虎の皮を褒賞として下賜する」と書いてある箇所は、チベットの歴史文献の中では最初のハタの起源になる記載資料だと推測されます。そもそもチベット族はまだ文献の無い時代では、居住地にシルクというものがまだ縁の無い時に野獣や動物の皮・羊毛を用いて贈り物や褒賞品にする習慣があったと言われています。

松贊干布が制定した国として褒賞品を定めた最初の法律である王法15条の上述の項目は、ハタを献じる儀礼文化を法として記したものと言えるでしょう。

また、「敦煌本吐蕃歴史文書」、「西藏王統世系明鑑²⁰⁾」によると、吐蕃国の第九代王、托列王贊普布德貢杰（བཅོན་པོ་དགུ་བ་ལྷ་དེ་གོང་རྒྱལ།：ザンプブ・ダーゴンジェ）は、ボン教を信仰しており、宗教規定によって羊毛を纏う習慣があり、ボン教徒の哇托堅（བལ་ཐོད་རྒྱལ།：ワートゥジェン（羊毛の帽子の意））が宗教儀式の際に羊毛を頭と首に纏ったことが記されており、これがハタの文化の由来となったとも言われています。ここでいう羊毛とは、羊毛の編物と推測します。ターバンのようなものを頭と首に纏ったと思われ、それが羊毛の織物になった

と解釈します。

「松贊干布伝²¹⁾」、「苯教志²²⁾」によると、松贊干布もボン教を信仰したことがあり、隋・唐の時代を経て所謂シルクロードを通過してきた西欧のペルシャ文化の影響を受けた服装は、松贊干布が「紅いシルクを頭に巻き、彩りある絹織物のマントを被り、先の尖り曲がった皮の靴を履く」という服装をしていたことで、ペルシャの風俗が吐蕃において一時流行し、そしていつの間にか羊毛の織物のような帯を纏う習慣がペルシャシルクに代わっていった。

これは、シルクの素材でハタが作られたことを記載する最初の文献であると推測できます。しかし、当時はまだ「ハタ」という言葉も無く、この様な高価で質の高いシルクは、宮廷や貴族の中で流行しただけで、多くの一般市民には縁のないものであったと思われます。

羊毛の織物の習俗が、その後マフラーのように帯状の毛織物となり、更に後になってシルクが現れ、羊毛の代わりに頭と首に纏うことに使った。これがハタの形成の第一歩ではないかと推測されます。

また 1042 年、チベット仏教カダム派²³⁾（迦當派）の開祖でもあるドムトゥン（仲敦巴：**འབྲུག་ལྷན་པ།**²⁴⁾）が、インド後期仏教の総本山ヴィクラマシーラ大寺院の大学匠アティーシャ（阿底峽：**ཇུ་ཉི་ཤ།**²⁵⁾）をラサに迎え、経を講じさせた時、シルクを礼品として献じたという文言がアティーシャとドムトゥンの師弟間での問答の内容を編纂した「弟子問答録²⁶⁾」に残っています。これもハタを献じる文化が記された一つの証しであったと思われますが、当時はハタという言葉はなかったので、これ以上の記載に留意されることもなかったようです。

ハタという言い方で世に現れるのは、フビライ・ハンが中国にモンゴル民族の征服王朝である元朝を樹立した時代に、下記に述べるようにパスパ（**འཇུ་མགོན་འབག་པ།**：八思巴²⁷⁾）によってもたらされたという節があります。

「元史・第二百二卷」の「列傳第八十九 釋老²⁸⁾」には、パスパについての記載がある中で、

「帝師八思巴者、土蕃薩斯迦人、族款氏也。……年十有五、謁世祖于潜邸、與語大悦、日見親禮。」と書いてあるように、パスパは、チベットのサスバ人、クン氏族の一人であり、15 歳の時にひそかにフビライと会い、たいへん好かれその日のうちに礼が与えられた。また、パスパとフビライの関係について「中統元年、世祖即位、尊為國師、授以玉印。命製蒙古新字、字成上之。……遂升號八思巴曰大寶法王、更賜玉印。」とも書かれてあるように、パスパはフビライに尊敬され、国師の称号を授かり、大宝玉印を授けられた。そして、モンゴルの新しい文字を作ることを命じられた。

パスパは、所謂モンゴルに行かされたチベット族であり、元王朝を皇帝であったフビライに重用された人物で、チベットに戻った時に成就と吉祥の文様のシルクを持ち帰ったことがきっかけとなりハタというものが改めて注目され大事にされるようになった。

チベットではパスパが、1264 年に元王朝の首都である大都²⁹⁾より初めて故郷のチベットに帰還した時、ラサー帯の大寺院の仏像、菩薩像及び僧侶、官僚に、帯状の細長いシルクを奉献或いは下賜したと伝えられています。

「ハタ」は本来チベット語の発音ではありません。タイトルにもあるようにチベット語で書くと「ཁ་བརྟམས།」となり、チベット語の「カダーリ」が変化したもので、表音表記では「カタ」となり、「ハタ（哈達）」とは綴らないのに、なぜ「ハタ」と呼ばれているのか。恐らくパスパがモンゴルから持ち帰った時、ハタについて話した語がモンゴル語の「ハターカ」に発音で、そのモンゴル音が「ハタ」という語に変化していったのではないかと思います。

著者がラサの大昭寺を訪ね、寺院の主持が境内を案内して下さった時にハタについて口伝によって伝えられる故事を教えて下さいました。その故事では、

パスパが大昭寺を訪ねた時、本尊に文成公主が王妃として迎えた際に持って来られた釈迦様を安置される本堂で釈迦様等の神々に白い带状のシルクを献上し、本尊の脇を通った時に、描かれた壁画の中の度母（ターラ神）の神が手を伸ばしてハタを求めた。以来「ジョウマダリンマ（ཇོ་མ་དཀར་ལེན་མ།：卓瑪達領瑪）」（チベット語でハタを求めるターラ神）と呼ばれるようになった、と伝えられています。故事の証しなのか、今でも大昭寺の本尊左側には、アティーシャとパスパの神像が祀られております。

（三）〈ハタの種類〉

ハタは作られた時代によって、素材、規格によってランクが分類されております。

正確な時期が明らかではないが、初期に作られたハタは次の二種類あり、特等ハタに分類されます。

- ・ネイサンマ・ハタ（内桑瑪哈達 ནང་བབ་ཅན་མ།）
- ・ガンチェレンチンマ・ハタ（関確仁欽瑪哈達 གཏུན་ཅེ་ལོན་ཅན་མ།）

その後に作られるようになった次の二つは、素材、長さも上記のものに劣るので、二等ハタに分類されます。

- ・ニドマ（尼徳瑪 ཉིད་མ་དེ་མ།）
- ・ドゥンガオマ（吨靠瑪 དྲུང་ཀའ་མ།）

更に後に作られるようになった次のものは、三等ハタに分類されます。

- ・チャンダオダジェマ（程到達傑瑪 རྩམ་ཏུ་འདེ་མ།）
- ・アシ（阿西 ཨ་ཤི།）
- ・スシ（索西 ལུ་ཤི།）
- ・シーズン（西尊 ཤི་ཕུན་མ།）
- ・ソナンハタ（索南 བསོད་ནམས་ཁ་བརྟམས།）

また、使い方、場所によってもハタの種類は分けられます。

宮中の内庫から持ち出される長さ2丈、幅2尺前後の規格で特製上等品のハタであり、材質も優れており「吉祥八瑞 (བཀྲ་ཤིས་རྒྱལ་པོ་བཅུ་དྲུག་།)」・「有寂安楽 (བཀྲ་ཤིས་བདེ་ལེགས་།)」・「化日呈祥 (ཉིན་མོ་བདེ་ལེགས་།)」・「長寿 (ཆོ་རིང་ཁ་བརྟན་།)」の4種類に分かれます。

ネイコ・ハタの縁に長城の図案、中央には右巻の法螺貝等八つのめでたい図が刺繍され、上下両端には「二竜戯珠」の刺繍があり、左右両辺には「打ち砕けぬ堅固さ」・「永劫にわたる存在」を象徴する「卍」の字符が印される。

・ワイコ・ハタ (外庫哈達 རྩ་མཛད་ཁ་བརྟན་།)

ネイコ・ハタ (内庫哈達) と相対する宮中以外の所にあったハタをいう。それを後に人々は習慣的にスシ・ハタ (素喜哈達) と称するようになったそうです。

ワイコ・ハタには、

・アシ・ハタ (阿喜哈達 ཁ་ཤི་ཁ་བརྟན་།)

・スシ・ハタ (索喜哈達 ལུབ་ཤི་ཁ་བརྟན་།)

があり、それぞれの内で上・中・下の三等に分かれ、そのうち最上級のアシ・ハタはシルクを素材として用い、品質は優良で、長さは6尺、幅は1尺前後。吉祥な菱形の図案が捺染される。

産地によって作られたハタもあります。

・衛蔵ハタ (དབུས་གཙང་ཁ་བརྟན་།)

・塔爾寺ハタ (སྐུ་འབུམ་ཁ་བརྟན་།)

・漢地ハタ (ཁྱུ་ནག་ཁ་བརྟན་།)

・邛峽ハタ (ཁྱེང་ལའི་ཁ་བརྟན་།)

これらはそれぞれ産地の地区・地域名や寺院の名前をとってハタの名としています。

上述のほかにも特殊の目的にしか使われない五彩ハタがあります。五彩ハタは、「彩箭 (སྐྱ་འཕྱེད་།)」をなすために神様に献じるもので、藍、白、緑、紅、黄色の五色のハタが束ねられて一本のハタとして献じられます。五色にはそれぞれ意味があり、藍色は青空、白色は白雲、緑色は河の水、紅色は空間護法神、黄色は大地に喩えられ、釈迦様などの神仏像の後背に献じられます。(写真2)

上述のハタは、原則として白色が主流だと言われ、他の色では、たまに青色、黄色のハタを見かけますが、著者が現地で調査したところ、ハタといえばチベット族にとって白色を意識している。チベット族が自分の気持ちを表すのは純白の白色が一番と思っているからです。他の色には特別意味がある訳ではなく、たまたまある色を使っているだけという結果でした。ハタの色は五彩ハタ以外、ほとんど白色しか使われていなく、特に高貴なネイコ・ハタのように内庫(宮中)のハタは、白色に限っています。

チベット族にとって、白色は純潔、吉祥、真摯、善良、正義、繁栄の象徴とされ、白色崇拜

は長い歴史を持っているといわれています。古来、チベット族の祖先は門の上や各種の器に白い羊毛を掛ける習慣を持っており、山の入り口・主要な道路のマニ石の塚 (མ་ཤིན་ལྷོ་ལྷ།³⁰⁾」の頂上には白い石を置き、矢を立てる祭り「ラーシーズ (ལ་ཤི་ལྷོ་ལྷ།³¹⁾」の際は矢柄に白い羊毛を掛けるなどの習慣があり、白色崇拜はいたるところに見られます。また、雪山を聖山とみなして巡礼に行き自分の住む環境を習慣的に「雪域」と言います。白色のものを愛し象徴としていることは民謡や歌謡にも表れ、現在チベットで老若男女を問わず最も愛唱されている歌にはハタの文字をみることができます³²⁾。

最も常に目にする風景である白色は、民族の緩やかに長い一生に伴って、自らチベット族の審美観念に自然に入り込み、チベット族の魂に滲み入っているといえます。

著者がチベット地区で見たところでは、ハタはほとんどがシルク或いはシルクに似た素材ででき、長さは様々あり、またそれぞれの文様が織り込んである。今チベット族の人々の心の中には、昔貴族であった人に対して尊敬の気持ちは持っているが、基本的に言えば現在は昔みたいに宮廷がある訳ではなく、また厳しい身分の上下関係による差も存在していません。人々は自分の心で判断し、おかれた環境の中で入手できるものを使っているようにみえます。

(四) 〈ハタの使い方〉

チベット文化といえば、全て仏教と関わりがあると言っても過言ではありません。ハタも本来は仏教の世界を中心に、全チベット地区に広まっていたものだと言えます。

ハタの使い方は、様々に広がりを見せ全てを枚挙することはできませんが、主な使い方を宗教と一般社会の二つに分けてみることを試みてみます。

1. 蔵傳仏教（チベット仏教）において

ダライ・ラマ³³⁾、パンチェン・ラマ³⁴⁾を始め、活仏、ラマ達が寺院を訪ねる時は、必ずその寺院の釈迦牟尼像、菩薩像にハタを献じ、仏像の両手に掛けます。

新しい仏像を寺院で迎える時や、仏像を別の寺院に移動する時には、ハタで包んで迎えられ、ハタを以って受け渡しされます。奉られる仏像の後背には白いハタを付けます。

また寺院に奉られる釈迦牟尼像、菩薩像等の神の後背に「彩箭」として、五彩ハタを付けます。(写真2)

ダライ・ラマ、パンチェン・ラマを始め活仏、ラマ、各寺院の主持等が、位の低い僧侶と面会する時は、先にハタを献じられ、別に用意したハタを相手に下賜します。位の低い僧が献じるハタは尊敬や歓迎の意味を表し、位の高い僧が献じるハタには加持と祝福の意味を表します。(写真8、9)

チベット自治区が解放される前、ダライ・ラマがいる官邸「ポタラ宮」が、政治・宗教の最高権力を有する中心機関であり、全権を有する最高権威の宮廷においては、ハタの使い方は厳しい規則がありました。

ネイコ・ハタ（内庫哈達）は、ガロン（ཐད་བཀའ་གཤམ་ཐིན་བཞུངས།³⁵⁾）と秘書官等によってチベット暦³⁶⁾正月二日にダライ・ラマに新年を慶賀する時だけに献じられ、普段は使われませんでした。

平時は、ダライ・ラマ、パンチェン・ラマに拝謁する時は、献ずるものすべて上級のアシ・ハタ（阿喜哈達）が使われた。そして宮廷の各級の官吏はそれぞれ、自分の身分・名号に応じて様々な等級のハタを使用し、分を越して礼を乱すような濫用の行為は許されませんでした。

ダライ・ラマ、パンチェン・ラマ等の位の高いラマが座る椅子の背凭れには、清めるため真白なハタが掛けられます。（写真 4、5、7）

ダライ・ラマ、パンチェン・ラマ等の位の高いラマが入寂された時、その神体の前にはハタが献じられます。（写真 6）

ダライ・ラマ、パンチェン・ラマを始め、活仏、ラマ、各寺院の主持等が、チベット地区以外からみえた賓客（密教徒以外の者も含め）に対して、例えば中国政府の役人、外国のVIPと面会する時や、その場所がチベット以外の地域であっても、ハタを相手に献じられます。（写真 11、12、13）1996年にダライ・ラマがアメリカを訪問し、ホワイトハウスで当時のクリントン大統領に会う時にもハタを差し上げています。

ダライ・ラマ、パンチェン・ラマを始め、活仏から訪問を受ける時は、その地域の居住者が境界外から境界内までハタを手に持ち行列して待ち、訪れた時にハタを献じます。（写真 10）

上級の寺院においては、献じられる沢山のハタを使いきれず、一部を下級寺院に授ける。下級寺院ではその授けられたハタを使うこともあったようです。また著者が、寺院の調査をしたケースでは、時には寺院が使い切れなかったハタを安い値段で新品のハタを買えない人々に譲る場合もあったが、最近では経済がよくなり、このような光景を目にすることは少なくなった。

2. 一般社会において

ハタは、一般のチベット族の人々にとっても日常生活の中でやはり不可欠な儀礼習慣で、民間人がハタを使用する時の規則は、比較的自由に、各々個人がおかれた環境で判断し決めることができます。

民間人が寺院を参拝する時に、本尊の神仏像に向かい下から像の首に投げ掛けて祈念します。

ラマを招き自宅で法事をする時には、ラマにハタを献じて出迎えます。

あるラマを一生の師として仰ぐ時にも、ハタを献じて請い願います。
寺院やラマ達に布施を差し上げる時、ハタに金品を包み差し上げます。

遠方の親戚や友人が訪ねてくる時、ハタをもって出迎え、また見送る時にもハタを差し上げます。

求婚する時、ハタを相手の家に持って行き、相手にハタを捧げ、受け取られれば承諾した意味になり、戻されれば拒絶の意味を表します。(写真14)

葬式の時、経文を唱える僧侶に対してハタを献じ、葬式が天葬（鳥葬）で行われる場合は、天葬師（認定された死体を分解する専門家）に、死者の家族からハタを差し上げます。

家屋等の建物の落成時にも、その祝いとしてハタを差し上げて祝います。

謝礼、謝罪の場合や、借金、返金の場合にもハタを献じ、その誠意を表します。

式典が行われる時、例えば競馬会を開催した時には優勝馬とその騎手を称えてハタを献じ、ハタを使うことでその儀式に権威と重みを与えます。

地方によっては次のような習慣があります。訪れた客人は、そこを去るときに、常に一本のハタを自分が休息した場所に残しておく。これは、「私がここを去るけれども、心だけはまだこの場所に留まっている」ということを意味するそうです。

ハタを献じることにも規則があり、一般にハタは長辺を二つ折りにし、更にもう一度同じ方向に折る。この時、始めにできた耳の部分を下にし、耳が隠れるように僅かに一方が被るように折る。両手で恭しく献じ、それによって仏教の「四大皆空」の教義と、相手に対する尊敬の意を表しており、ハタの一点の汚れも無い純白は、自らの邪まなところのない心を表しており、またハタの細長い形は、末永く親しく付き合うことができるようにと願いが込められています。

普通、活仏や目上の人間にハタを献じる時は、90度に身を折り、両手でハタを頭上にまで捧げ持ち、相手の手か座前にまで献じ、もし相手が馬上にある時は、ハタを馬の首に掛けることもできます。

主人が客を出迎える時、主人が両手でハタを捧げ客人に献じ、客人は受け取った後で、別のハタを一枚取り出し主人に贈り返します。

後輩が先輩にハタを献じる場合には、先輩が受け取った後、それを後輩の首に巻くことで後輩に対する祝福する意味を表します。

同輩の間でハタを献じる場合、普通やや身を屈め、両手を前に差し伸べて、ハタを相手の

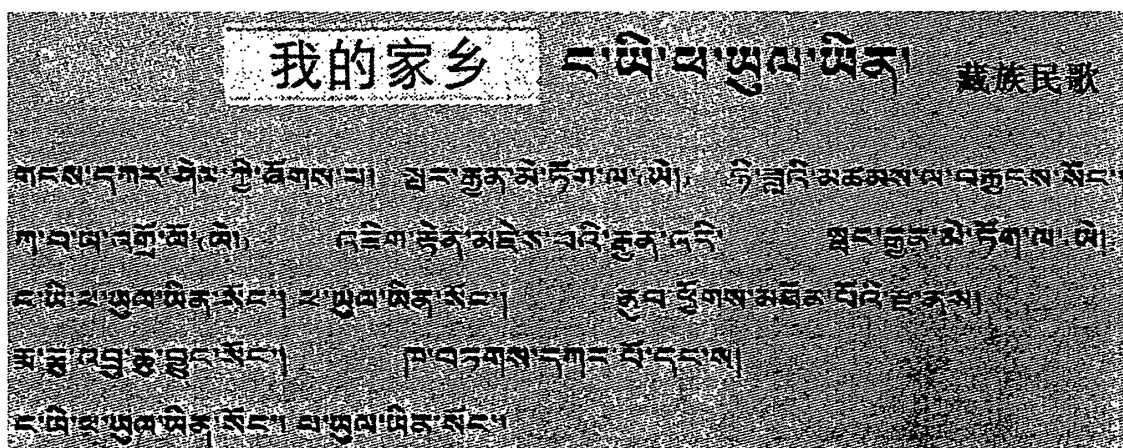
手の中か腕の上に乘せればよいとされています。

(五) 〈結 論〉

ハタの使い方をみると、チベットという厳しい自然環境に囲まれて、特殊な社会、経済構造、各部落によって違う生活習慣、価値観の中で、また歴史からみても身分の上下関係が厳しかったチベット社会において、天から地へ、地から天へ、人間から神へ、神から人間に、身分の高い者から低い者へ、低い者から高い者へといったいわゆる縦の繋がりに対して、また人間社会のいわゆる横の繋がりに対して、そして富貴者と貧困者、尊者と卑者、活きている人間と往生した死者とを、正に縦、横の全ての社会と世界で、言語や文字、物質が要らずに一枚のハタで通じあうことができます。

言い換えればチベットの人々の生活に円満をもたらすため、あらゆる世界、あらゆるフィールドへ、自分の心を相手に伝え捧げることができ、万事を円満にもっていく大きな力を持っているのもこの一枚の白く長い帯であるハタです。

そのハタの力は21世紀の今日でも変わらず人々の心の奥底に染み込み、愛用され続けています。現在のチベットで老若男女を問わず愛唱される「我的家乡 ངའི་ཡུལ་ཡིན།」の歌の文句にもハタは詠われ、変わらず愛されていることがその証明といえます。



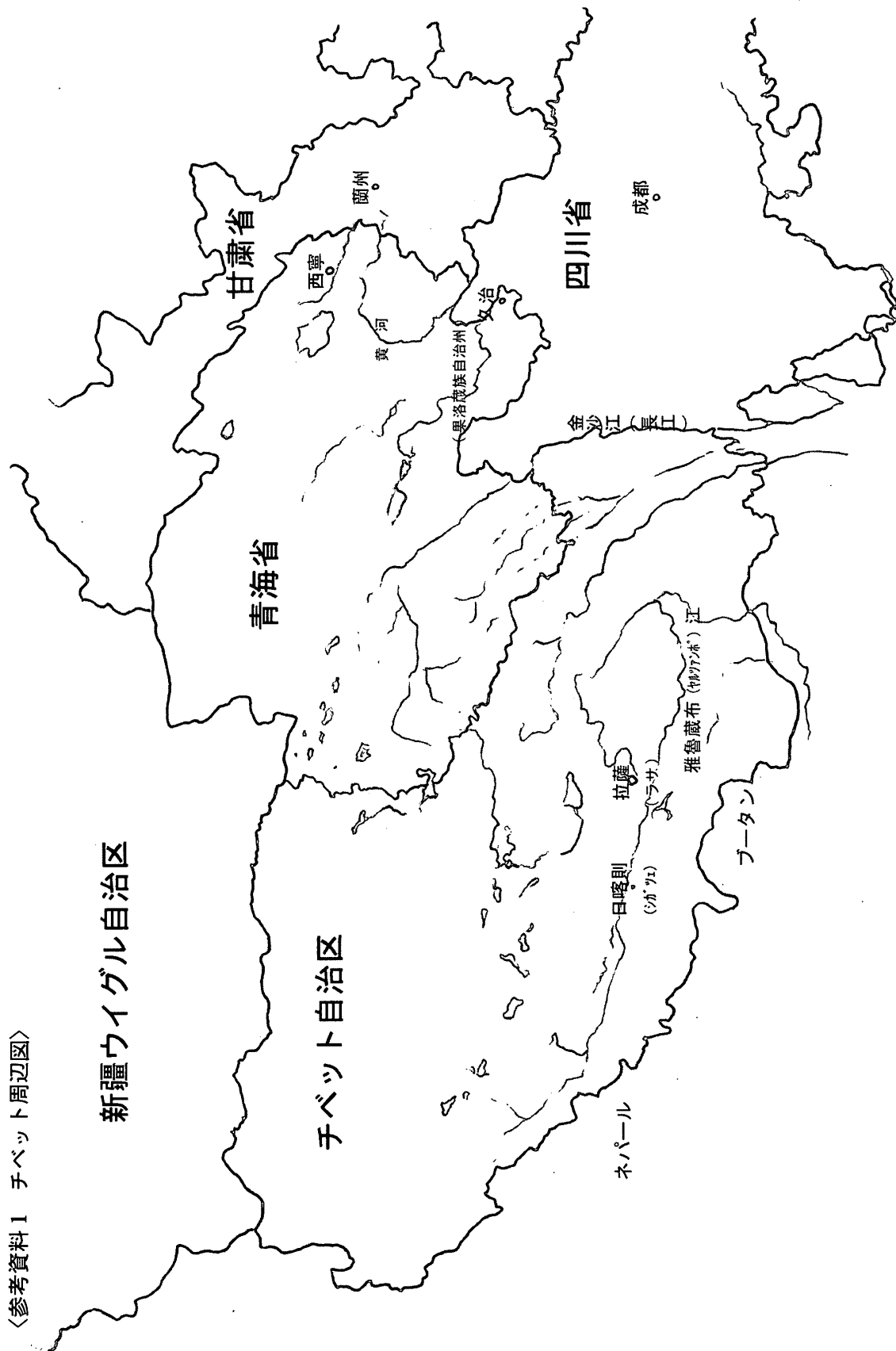
(歌詞の大意)

『ああ、神奇の雪山、私のふるさと。雲の上に高く聳える群山、長江と黄河の源、それはまるで祖国の母の肩にかかる二本の潔白なハタのよう。ああ、吉祥壮麗な高原、私のふるさと。』

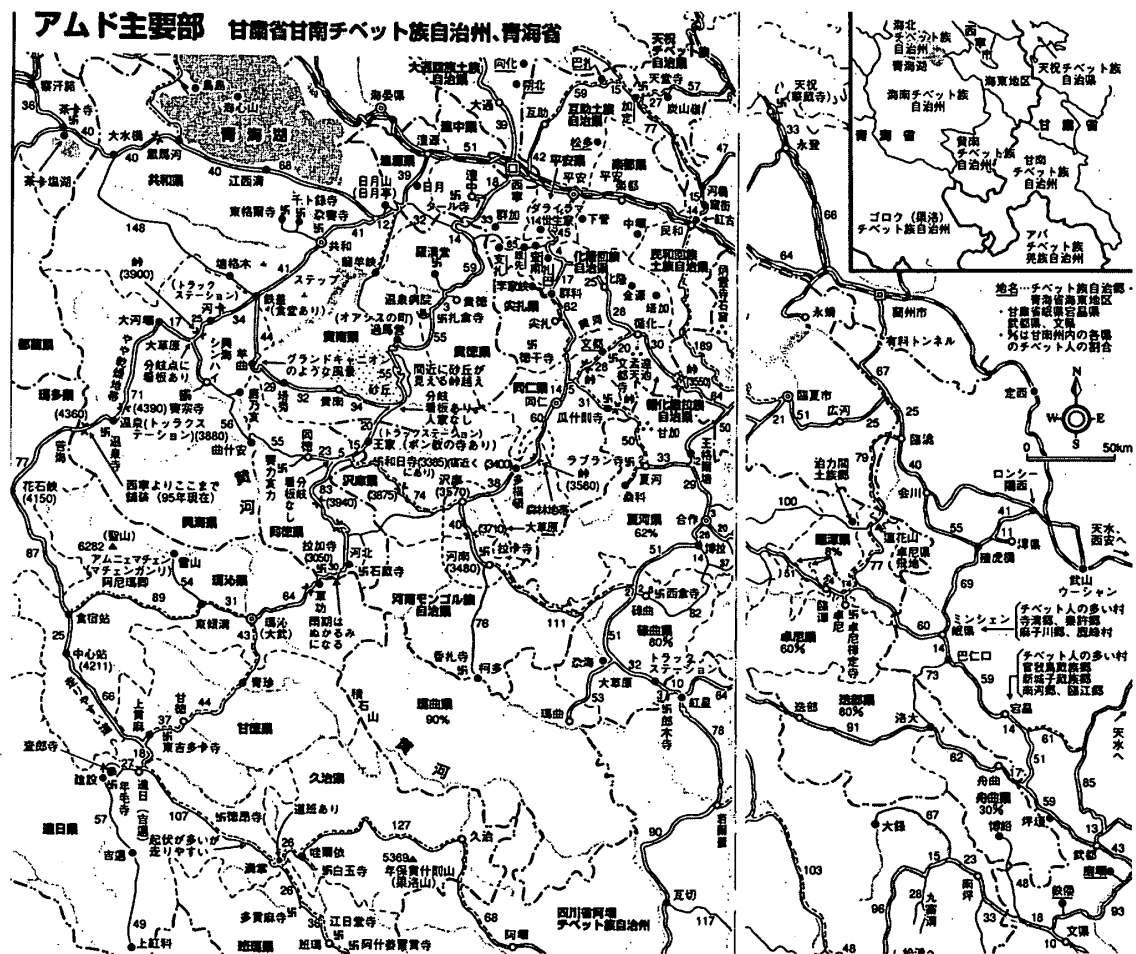
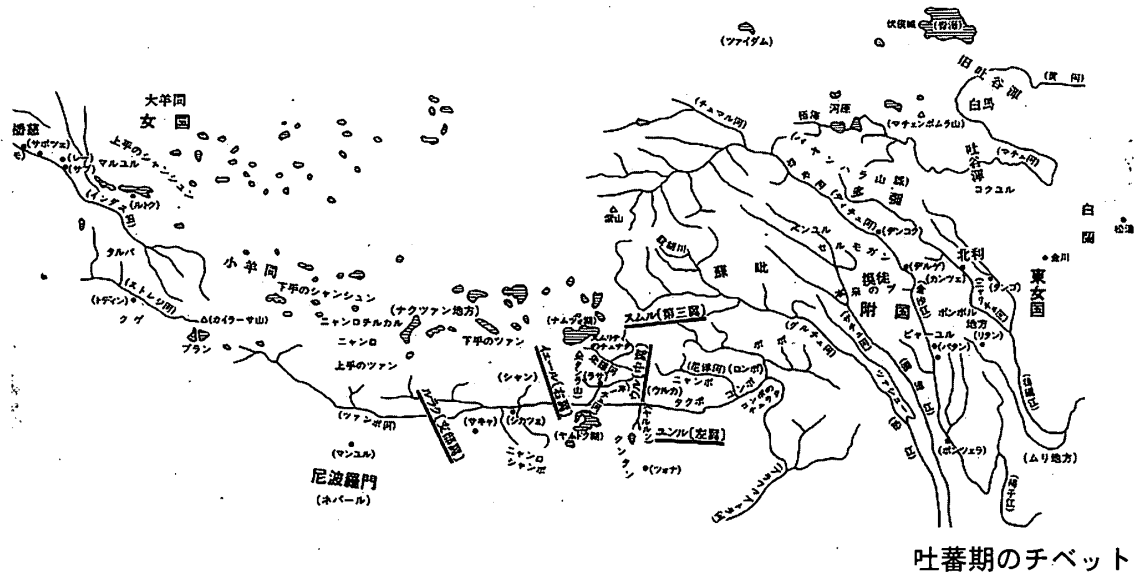
このハタは、チベット民族の智慧と真心の結晶であり、チベットの天・地・人を繋げる紐帯でもあります。ハタこそ、正にチベット民族の“心”であるといえるでしょう。

最後にこの場を借りて、この調査・研究に協力して下さった西藏自治区人民政府の皆様、大昭寺（ジョカン寺）、哲蚌寺（デブン寺）、拉卜楞寺（ラブラン寺）、扎什倫布寺（タシルンポ寺）、塔爾寺（タール寺）の主持を始め各寺院の僧侶の皆様、西藏大学、青海民族学院

大学、北京大学、中央民族大学の教授、西藏自治区檔案館、北京の社会科学院民族研究所の所長を始め研究員の皆様、日本のチベット学権威で東京大学名誉教授である山口瑞鳳先生、早稲田大学講師の馬挺先生、財団法人日中文化交流財団西藏事務所の三旦嘉措、三木雪碧、強巴卓瑪、倫珠、卓瑪、丹増秋旺等々皆さんにたいへんお世話になり、この拙文で感謝の意を表したい。



〈参考資料2〉



アムダ主要部 (下部 果洛藏族自治州久治県)

〈参考資料 3〉



(1) ポタラ宮の本生殿に祀られる釈迦牟尼像（左）とダライラマ5世像（右）。ダライラマ5世像の腕に純白のハタが掛けられている。

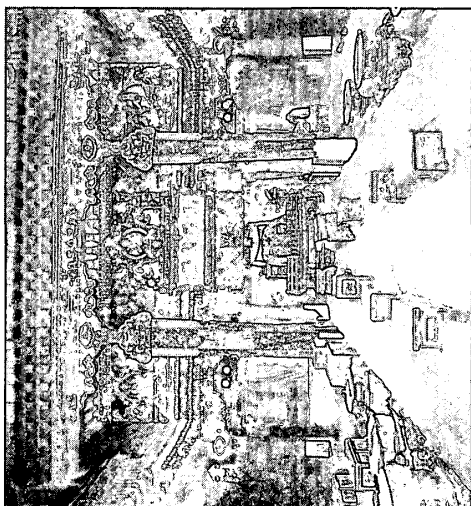


(3) ポタラ宮の持明殿にある蓮華生大師（パドマサンバヴァ）の体に真白なハタが掛けられている。

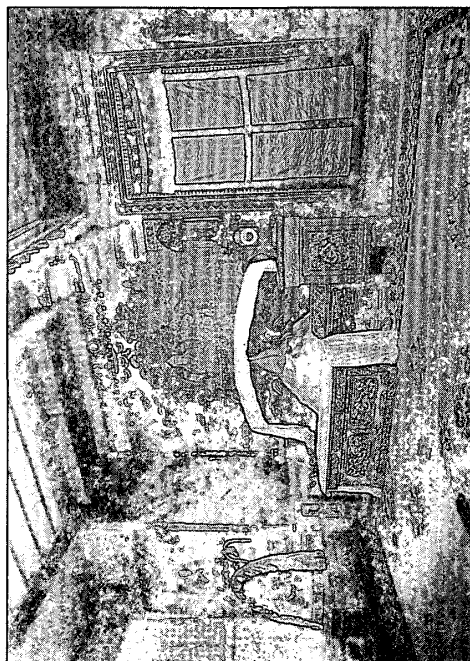


(2) 1800年にダライラマ8世が建造したポタラ宮内にある弥勒菩薩の後背と腕には五彩ハタが掛けられる。

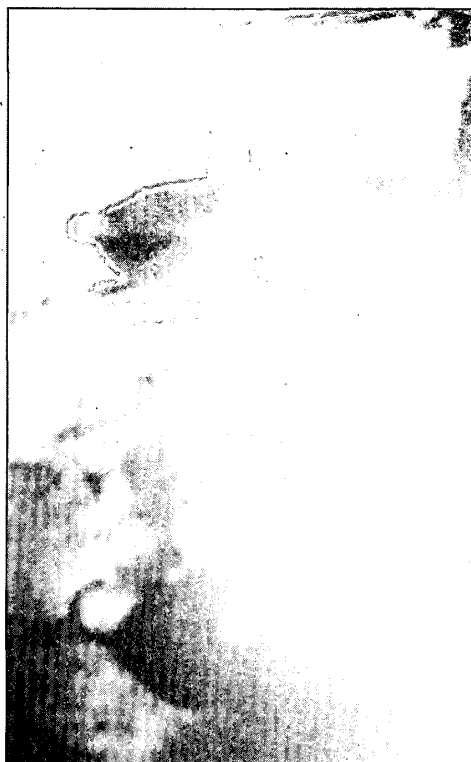
〈参考資料4〉



(4) ポタラ宮の東大殿。ダライラマ5世がデブン寺から遷居した後、1650年に新年の儀式が執り行われた。中央の宝座にはハタが掛けられている。



(5) ポタラ宮の長寿殊勝宮にあるダライラマ14世が佛教を勉強した場所。椅子には真白なハタが掛けられている。

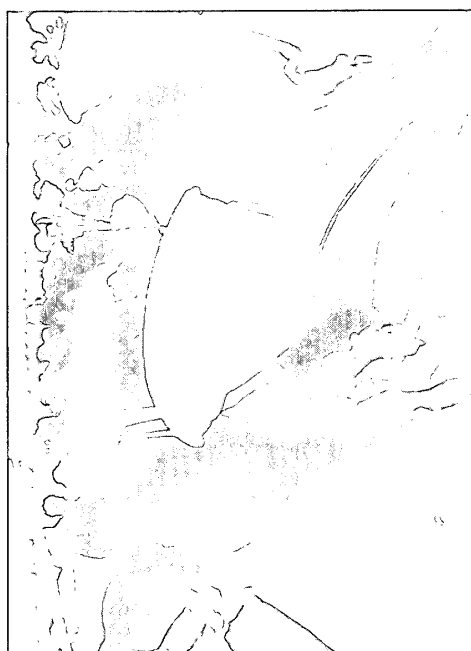


(6) 入寂されたパンチェン・ラマ10世の前には沢山のハタが献じられる。

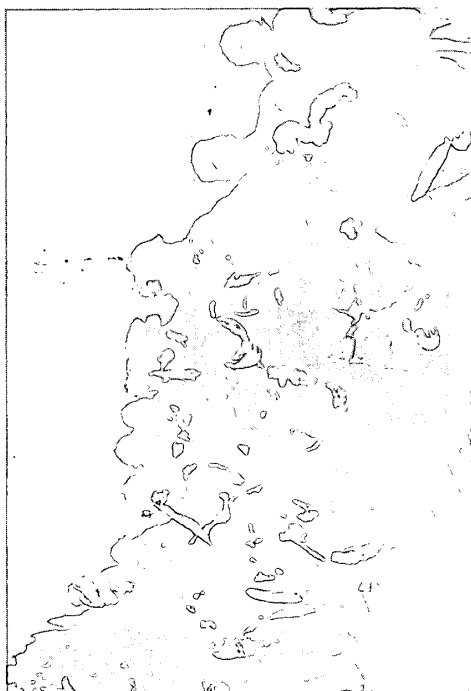


(7) パンチェン・ラマ11世の椅子には真白なハタが掛けられている。

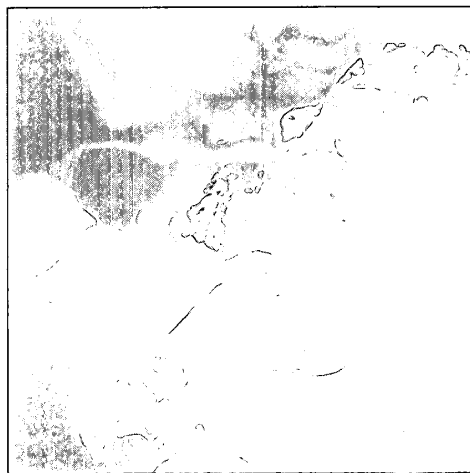
〈参考資料 5〉



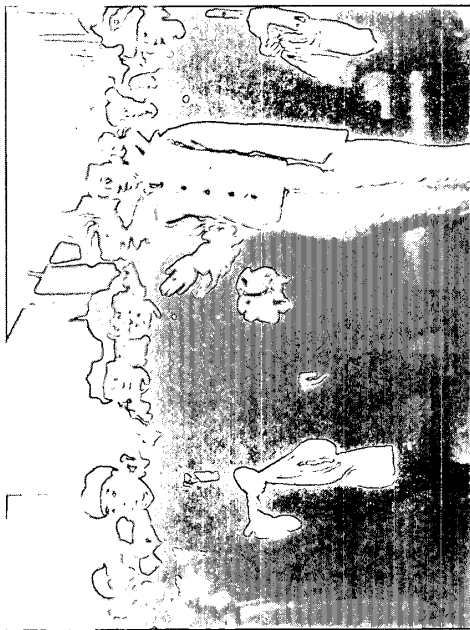
(8) パンチェン・ラマ11世が拉卜楞寺を訪問した時、高僧から白いハタを献じて迎えられた。



(10) ハタを手を持ちパンチェン・ラマ11世を出迎える群衆。

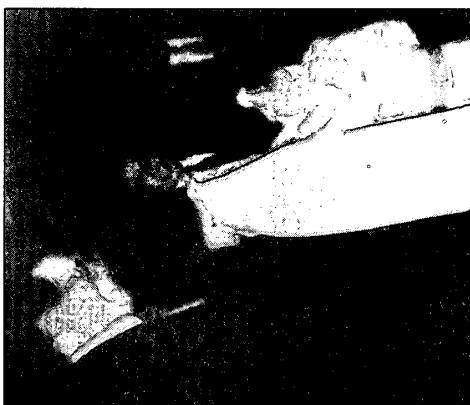


(9) パンチェン・ラマ11世が拉卜楞寺を訪問した時、ラマに加持と祝福を表すためにハタを下賜する。

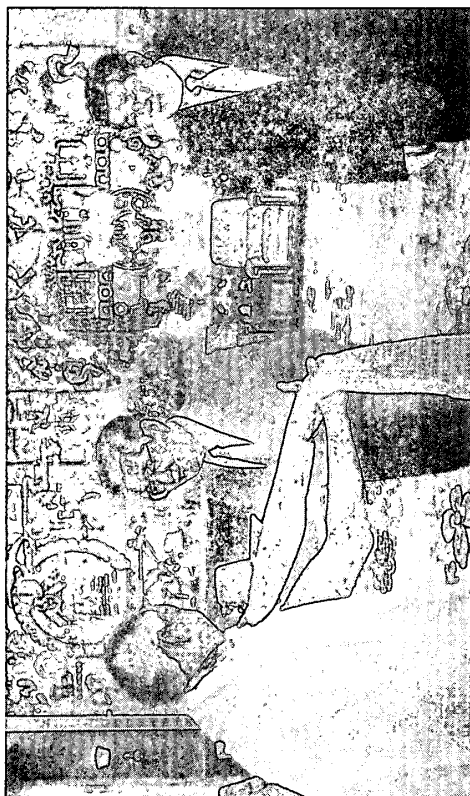


(11) 1950年代、パンチェン・ラマ10世(右)から献じられたハタを持っている周恩来(左)と朱徳(中央)。

〈参考資料 6〉



(12) 1990年代、パンチェン・ラマ11世が江沢民に会う時、ハタを献じられた。



(13) 2005年2月3日に人民大会堂にて、パンチェンラマ11世が胡錦濤に会う時にハタが献じられた。



(14) 婚礼でハタを献じられる新郎新婦。

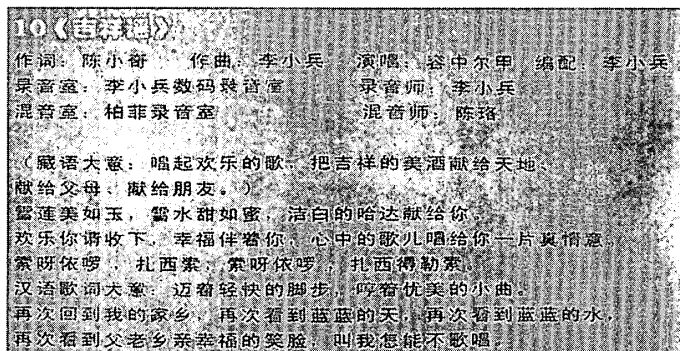


(15) 著者が遊牧地区を訪問した時、迎えに来た騎馬隊長からハタを献じられた。

〈注釈・参考資料〉

- 1) 《哈達の来歴・用途和品種》(藏文)/達果著「西藏文芸」1994年第2期
《哈達文化的內涵及其他》/巴桑羅布著「西藏民俗」1994年第3期
《藏族哈達文化》/巴桑羅布著「中国西藏」1994年第6期
- 2) 《西藏歴史文化辞典》…王堯・陳慶英主編/西藏人民出版社・浙江人民出版社 1989年
- 3) 松贊干布…チベットを統一し吐蕃国を成立したチベット33代の贊普(王)。(国王在位629-650年)
- 4) 《西藏通史一松石宝串》…恰白・次旦平措、諾章・吳堅、平措次仁著
陳慶英・格桑益西・何宗英・許德存訳/西藏古籍出版社 1996年1月
- 5) 根敦群佩…(1905-1951年)清朝時代のチベット歴史学者。青海人。《白史》を著し、現代科学知識によってチベットの宗教、歴史を研究したチベット族の歴史学者の第一人者。
- 6) 《白史》…根敦群佩著/1946年。吐蕃王朝の歴史を論証した書籍
- 7) 《漢藏史集》…達倉宗巴・班覺桑布著/四川出版社 藏語版1985年/西藏出版社 英・漢語版 1986年
- 8) 《賢者喜樂》…「漢藏史集・智者喜樂瞻部明鑑」 達倉宗巴・班覺桑布著/1943年
- 9) 《賢者喜宴》…巴俄・祖拉成瓦所著/手抄本1564年
- 10) 《敦煌本吐蕃歴史文書》…吐蕃の贊部伝記、吐蕃大事紀年、贊普世系の三部を記述。王堯・陳踐訳/民族出版社 1992年
- 11) 《旧唐書》…五代十国時代の後晋の時代、945年、劉昫等によって編纂。吐蕃伝は、卷一九六、列伝一四六。
- 12) 《新唐書》…北宋の時代、1060年、欧陽修、宋祁等によって旧唐書を再編纂した唐代の正史。旧唐書の欠を補い補修したもの。王忠撰/科学出版社出版 1958年
- 13) 《新唐書・吐蕃傳 箋証》…王忠撰/科学出版社出版 1958年
- 14) 文成公主…唐の時代、玄宗皇帝の宗室の娘。640年に松贊干布が息子である貢松貢贊を新王に立て、その妃として嫁いだ。新王は3年で逝去し、その後松贊干布が再登位し、その妃となった。
- 15) 大昭寺…聖地ラサにある最も聖なるチベット仏教の寺院。チベット全土から来る巡礼者はこの寺院を目指しやってくる。正式名称はトールナン寺であるが、チベット人の間では本来この寺の本堂のことであるジョカンの名で呼ばれており、中国語では大昭寺といい、7世紀に建立された。大昭寺の建立については諸説があり、松贊干布のネパール人王妃であるティソンが建立したという説、文成公主だとする説、松贊干布の菩提を弔うために建立したという説など。
- 16) 小昭寺…チベット語でラモチェと呼ばれる。大昭寺とならぶチベット最古の寺。文成公主が亡父貢松貢贊の菩提を弔うために7世紀半ばに建立された。文成公主が興入れの際に唐から持参した釈迦牟尼像を本尊としたが、その後、釈迦牟尼像は大昭寺に移り、不動金鋼像が本尊となっている。
- 17) 《紅史》…モンゴル語の訳名は「烏蘭史冊」という。
1363年 蔡巴・貢噶多吉の著作。
1982年 東嘎・洛桑赤列 校正のチベット語本 北京民族出版社出版
1988年 陳英慶・用潤年漢語訳本 西藏人民出版社出版
- 18) 《青史》…宣努貝著作 手抄本 1478年
- 19) 《新紅史》…索南扎巴著 手抄本 1538年
- 20) 《西藏王統世系明鑑》…丹巴・索南堅贊著 チベット語本/民族出版社出版 1982年
- 21) 《松贊干布伝》…王忠著/上海人民出版社 1961年
- 22) 《苯教志》…楚臣堅贊著
- 23) カダム派…アティーシャの「菩提道燈論」の理論を基礎として、1056年、弟子のドムトツンが創立したチベット仏教の一派。14世紀に出たツォンカバ(宗喀巴:1357-1419年)は、アティーシャの教学を基礎としてゲルグ派を創始し、カダム派の主流も吸収された。
- 24) ドムトツン…(1005-1064年)チベット仏教カダム派の創始者。
- 25) アティーシャ…(982-1054年)東部インドベンガルの一王族として生まれ、29歳の時オーダータプリー僧院に入りディーバンカーラシュリジュニャーナと称した。ここで中観学を中心とする顕教を修め、31歳でスマトラに渡り、シュリヴィジャヤ仏教王朝の仏教指導者ダルマキールティ(法称)のもとで瑜伽行派の修業をし、セイロンに渡り、大小乗の経論や呪法を学んだ。帰国後ヴィクラマシーラ大寺院の大学堂長として迎えられ、顕密両教に通じた10世紀のインド仏教界最高の指導者となった。1040年、61歳の時、弟子を伴ってインドを発ちネパールで1年余を過ごした後、1042年西チベットのトリン寺に入った。以後3年伝道・翻訳・著述に専念し帰国の途についたが、ネパール国境で戦争が始まり帰国の機会を失ってウー地方に行き、サムエ寺に住んだ。その後ラサの東方キチュ河畔のネタンに住み、ラサやエルバ地区を中心に伝道し、100余点の著作を残し1054年73歳で入寂した。代表的著作は『菩提道燈論』『入二諦論』『略修燈明論』があり、以後のチベット仏教を方向づける教理となった。

- 26) 《弟子問答録》…チベット仏教カダム派で、アティンシャがドムトゥンと問答した内容により編成された手抄本
- 27) パスバ…(1235-1280年) 中国元王朝のチベット仏教サキャ派の高僧で、本名、ロゲルツェン＝ペルサンボという。幼児から聡明であったので、チベット語で「聖者」を意味するパスバまたはパクバの敬称で呼ばれた。パスバは、3歳の時には梵語を念じ、8歳では「仏本生経」を読誦し、9歳では法会の時に「喜金剛読第二品」を講じたといわれる。
- 28) 《元史・第二百二卷》…元代の紀伝体歴史書。全二一〇卷。明の宋濂・王禕等の撰。1370年成立。本紀四七卷・志五八卷・表八卷・列伝九七卷。誤謬・疎漏が多く、清代以降、何人かの人が補修を試みた。
- 29) 大都…現在の北京市。1267年にフビライが26年を費やして現在の北京に造営した都市で、1272年に大都と称し、のちにフビライが中国全土を統一すると政治の中心となった。北京地方はモンゴル高原・東北地区(満州)と中国中原の間の中継点に当たることから軍事的に重要な土地で、中国北辺を支配した契丹人(キタイ人)の遼の時代は北方民族の支配下に置かれ、遼を滅ぼした金が首都中都大興府を置いた。モンゴルの圧力を受けた金が中都を放棄して以来、一時衰えたが、モンゴル本土と中国の中継点であることから復興され、通商を重視したフビライの元で経済的に著しく発展した。
- 30) マニ石の塚…マニ石とはチベット文字とさまざまな図案を刻んだ6字マニ真言を刻んだ石塊、石板。マニ石にはよく6字真言(オン、マ、ニ、パ、ミ、ホン: 阿弥陀仏の意)と各種の仏教経典が刻まれている。彫刻したマニ石は、形も内容もさまざまである。ボン教崇拜の竜、魚、日、月、鳥の頭、獣頭人身像のほか、仏教題材の釈迦牟尼、十一面千手千眼観音、妙音女神、度母、大威徳金剛、力士及び各種の護法神像、天王像が彫刻されているものもある。また、宗教史上の人物、例えばツォンカバ、パドマサンバヴァ、文殊仏像が描かれているものもある。
- 31) ラーシーズ…青海省黄南藏族自治州同仁県一帯に伝わる民間舞踊。チベット語で神武を意味し、竜鼓舞とも言われる。
- 32) 「吉祥謡」…チベットで愛唱される歌謡の一つ。ここには漢訳された歌詞を掲載するが、歌はチベット語で歌われる。
『雪蓮花の花は玉のよう、雪解けの水は甘く蜜のよう、潔白なハタをあなたに献じます』
- 33) グライ・ラマ…チベットの政權教權をもつ活仏の称号。グライとは蒙古語で大海、ラマとはチベット語で師を意味する。ツォンカバ(宗喀巴)が創始したゲルク派に属し、ツォンカバ(宗喀巴)の甥ゲドゥン＝トゥッパ(1391～1474)の転生を継承する3代目のソナム＝ギャンツォ(1543～88)に師事した蒙古のアルタン＝ハンがグライの称号を贈ったのが最初である。この系統の転生活仏を代々グライ＝ラマと呼ぶ。初代、2代は追贈されたものである。
- 34) パンチェン・ラマ…チベット最高の活仏グライ・ラマについて副法皇の地位にあり、タシルンポ寺の座王を務める。パンチェン・ラマは阿彌陀如来の化身であるとされている。ゲルク派に属し、ツォンカバの高弟ケー・トゥッジェの4代目の転生者ロブサン・チョキ・ゲルツェンが、5代グライ・ラマの師となって教学を指導した功績に対して与えられた称号で以後、代々パンチェン・ラマと尊称される。
- 35) ガロン…チベット地方政府の大臣。
- 36) チベット暦…原則として1月を30日、1年は12ヶ月、すなわち1年を360日として計算される。



〈その他の参考文献〉

1. 《ソンツェン・ガムポ王の「一六条法」の虚構性と吐蕃の刑法》 山口瑞鳳著／隋唐帝国と東アジア世界 抜刷
2. 《西藏》上・下 山口瑞鳳著・許明銀訳／全佛文化事業有限公司 2003年
3. 《藏族通史・吉祥宝瓶》 得荣・澤仁鄧珠著／西藏人民出版社 2001年
4. 《八思巴生平与「彰所知論」对勘研究》 王啓龍著／中国社会科学出版社 1999年
5. 《西藏地理》 楊勤業・鄭度著／五洲伝播出版社 2002年

6. 《西藏宗教》 朶藏加著／五洲伝播出版社 2002 年
7. 《西藏歴史》 陳慶英著／五洲伝播出版社 2002 年
8. 《チベット》 旅行人編集室著／旅行人 1998 年
9. 《栄悟寺 IN 栄悟部落》…三木友里著／明星大学研究紀要 1999 年
10. 《西藏の文明》 石泰安著・耿昇 訳／中国藏学出版社 1999 年 1 月
11. 《紅史》 蔡巴・貢噶多吉著 東嘎・洛桑赤列校注 陳慶英・周潤年訳／西藏人民出版社 2002 年 4 月
12. 《青史》 廓諾・迅魯伯編著 郭和卿訳／西藏人民出版社 2003 年 7 月

参考資料 2

地図「吐蕃期のチベット」国立民族学博物館

地図「チベット」旅行人編集室著／旅行人 1998 年

参考資料 3～7

写真 (2) 《雍和宮》／民族出版社 1993 年

写真 (3)～(9) 《班禪大師駐錫地扎什倫布寺》 蒙紫、廖頰、貢布達爾去編纂／民族出版社・外文出版社 1993 年 9 月

写真 (10) 《西藏歴史文化辞典》 王堯 陳慶英主編 西藏人民出版社・浙江人民出版社 1989 年

写真 (11)～(15) 《布達拉宮》 同波瓦・土登堅参主編 西藏布達拉宮管理处編／中国旅游出版社 2004 年 8 月

写真 (16) 〈人民日報・海外版〉 2005 年 2 月 4 日